

教育課程部会特別活動ワーキンググループ（第7回）

1. 日 時 平成28年5月13日（金）16時30分～18時30分
2. 場 所 文部科学省3F 2特別会議室
3. 議 題 （1）特別活動の充実・改善の方向性について

【貝ノ瀬主査】

定刻となりました。ただいまから、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の特別活動ワーキンググループの第7回目を開催いたします。本日もお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。

議事に先立ちまして、先月14日から続きます熊本県を中心とした九州地方での一連の地震によりまして尊い命を落とされた方々の御冥福をお祈りしたいと申し上げますとともに、被災地の皆様に心からお見舞いを申し上げたいと思います。

学校自体が被災をしたり、避難所となったりしたことによりまして、これまで熊本県内の半数以上の学校で授業が行えないという状況にございましたけれども、約1か月がたちまして、来週の月曜日、16日からようやく熊本県内でも全ての学校で授業が再開されるということでございます。一方で、まだ多くの方が不安で不自由な生活を余儀なくされておられるとも伺います。一日も早く被災された方々が平穏な生活を取り戻されることを皆さんと一緒に心からお祈り申し上げたいと思います。

本日は、大変申し訳ありませんが、私自身所用がありまして途中で退席いたしますけれども、その後の進行は須藤主査代理に交代していただくということでお願いしたいと思います。

まずは配付資料の確認を事務局からお願いしたいと思います。

【小野教育課程課課長補佐】

本日は、議事次第に掲載しておりますとおり、資料の1から7までと参考資料、また、いつものようにその他の机上の参考資料を配付させていただいております。不足等がございましたら、事務局にお申し付けいただければと存じます。

【貝ノ瀬主査】

それでは、これより議事に入りたいと思います。

今日は第7回目となりまして、そろそろワーキンググループとしてのまとめの姿も意識しながら、これまで御議論いただいていたことを、ほかの教科等との関係も見つつ整理していくことができればと思っています。

御議論いただきたい資料も大変多くて、資料1から4までの特別活動における「見方や考え方」を踏まえた特別活動のイメージ、育成すべき資質・能力と評価についてということで一区切り、一くくりということ、それから、資料5-1の特別活動の内容構成のイメージについてということでの一区切りということで、二つに分けて議論を深めてまいりたいと思います。

では、まず、事務局から、今日の一つ目の論点ですね、これについて説明をお願いしたいと思います。

【小野教育課程課課長補佐】

それでは、論点の前半の特別活動の「見方・考え方」を踏まえた特活のイメージ、育成すべき資質・能力と評価の部分につきまして、資料の1から4に関わりまして御説明をさせていただきます。御意見を頂ければと存じます。

前半、この資料1から4でございますけれども、それぞれ関わり合っておりますので、若干説明も行ったり来たりさせていただくことがあるかと思っておりますけれども、申し訳ございません、御承知おきいただければと思います。

まず、資料1でございますけれども、本ワーキンググループにおきましては、毎回、本日はこういったテーマにつきまして、論点につきまして御意見を頂きたいという論点を最初の資料でお示ししているという形でやってまいりましたが、先ほど主査からもお話ありましたとおり、そろそろワーキンググループとしてのまとめという形も意識するということもありまして、資料1につきまして、今回は特別活動の改善の方向性のたたき台という形としまして、これまで御意見頂いてきた下に、特別活動、今回の改訂でどう改善していくのかという方向性のたたき台という形でまとめました。本日、各資料等につきまして御意見を頂きまして、これを次回に向けて文章化してワーキンググループのまとめにしていくと、そういったような流れにしていくことができればなと思っております。今、各ワーキンググループ、大体8回ぐらいまででおまとめをするというところで議論を進めておまして、最終的にはまとめの文章につきましては各ワーキンググループおおむね共通の構成になるような形で整理をするということもやっておりますので、御議論いただいたものをそういったものに落とし込むという流れで進められればなと思っております。

この資料1でございますけれども、大きく1.と2.の二つで構成しております。今回、この特別活動の議論につきまして大きく二つの視点でということで、一つは、この特別活動そのものを通じて育成すべき資質・能力をどう明確化するかという大きな論点と、2ページ目には2.としまして、教育課程全体におけるこの特別活動という領域が果たすべき役割というものを明確にするという、この二つの視点で大きく議論をしていくことが必要じゃないかということで、1.と2.にまとめております。

まず1.でございますけれども、ここに四つの論点を入れてございます。まず一つ目には、特別活動の特質に応じた「見方や考え方」ということを明確にしていくべきではないかという論点を入れております。これにつきましては、資料2-1をまず御説明させていただければと存じます。この2-1の図の一番上のところに特別活動における「見方や考え方」の案ということを入れております。今回、この「見方や考え方」というものを各教科の特質に応じて整理するというを全体のワーキンググループの中で共通の課題として検討させていただいております。この「見方や考え方」というのは、見方というのは、様々な事象を捉えるそれぞれの教科や領域ならではの視点、考え方というのは、思考の枠組みといえますか、各教科ならではの考え方の枠組みというものを整理することによって、それぞれの教科の特質が見えてくるのではないかと、また、それがお互いに見合うことによって関係性等が見えてくるんじゃないかということで整理できないかということを議論しております。

この特別活動の「見方や考え方」をどう整理するかの前に、一旦、ほかのワーキンググループでどういうふうはこの「見方や考え方」というものを議論しているのかというのを幾つか事例を紹介させていただければと思います。

お手元の資料2-2で「各教科等の特質に応じた『見方や考え方』に関する資料（各部会・ワーキンググループで検討中の案）」というものがございます。まだ各ワーキンググループで正に検討途中段階のものでありますので、これからどんどん変わり得るものではございませんけれども、各教科ごとに議論しているものを付けております。

例えば1ページ目には国語科の資料を付けています。

2ページ目には、また全然違う資料の体裁になっておりますけれども、2ページ目は社会科の「社会的な見方や考え方」というものであります。この社会科のものを少し例に紹介をさせていただきますと、社会科は、小学校の社会科、中学校の社会科、中学校は地理的分野、歴史的分野、公民的分野というのがありまして、高校に行きますとそれが地理歴史

科、公民科という二つの教科に分かれ、その中でも地理と歴史に分かれてくるということがございます。この中で例えば小学校というところを見ますと、小学校においては、「社会的事象の見方や考え方」ということで、位置や空間の広がり、時期や時間の経緯、事象や人々の相互関係に着目し社会的事象を見だし、事象を比較・分類したり総合したりして、国民生活と関連付けて考えるというような社会的な事象の「見方や考え方」を育むということを小学校ではやっていくというようなことで案を整理しております。

また、3ページ目以降、数学や理科、各教科ごとにそれぞれ議論しているところがあるんですけども、今回、特別活動の「見方や考え方」を議論していただくに当たりまして、一つ参考といたしますか、比較になるかなというところで、15ページ目に総合的な学習の時間の「見方や考え方」のイメージ・案を付けております。15ページ目をごらんいただけますでしょうか。総合的な学習の時間ワーキンググループにおきまして、まだ議論が途中なので、恐らくかなり大きく変わっていくんじゃないかというところではございますけれども、「総合的な時間の特質に応じて育まれる探究的な見方や考え方」ということで、高等学校のところを例に紹介させていただきますと、「実社会や実生活の中から問を見だし、よりよい課題解決と新たな価値の創造に向けて、各教科等の特質に応じて育まれる見方や考え方を総合的に活用して、広範かつ複雑な事象を捉えて考えたり、一つの事象を多様な角度から捉えて考えたり、現実の複雑な文脈の中で物事を捉えて考えたり、自分自身の在り方生き方と関連付けたりして捉えて考えたりしながら、物事の本質を探って見極めようとする」と、こういった形で総合的な学習の時間の「見方や考え方」を整理できないだろうかという議論を頂いているところであります。各教科とこの総合的な学習の時間という領域の違いとしまして、総合的な学習の時間の総合たるゆえんといいますか、各教科等の特質に応じて育まれる見方や考え方を総合的に活用するという部分が入っているということと、また、ただほかの教科で育んだ力を使うというだけではなくて、総合的な学習の時間ならではの物事の本質を探って見極めようとするという要素、この二つの部分を入れて考えられないだろうかというふうに、今、考えているというところでございます。ここもなかなかまとめはいろいろなところがありますので、今後、大きく変わっていくところではありますけれども、こういった議論もしているところでございます。

資料2-1にお戻りいただきまして、済みません、行ったり来たりで恐縮でございます。こういった各教科等で今検討されているものも少し踏まえながら、また、本ワーキンググループにおきましてはこれまで、よりよい人間関係の構築、よりよい集団生活や社会の形

成、それから自己の実現という大きく三つの視点からこの特別活動を整理できないかというところで御議論いただいていたことも踏まえまして、特別活動における「見方や考え方」をこう整理できないかということで案としてまとめております。

「各教科等の特質に応じて育まれる見方や考え方を総合的に活用して、集団や社会の形成者という視点から問題を見だし、よりよい人間関係の構築、よりよい集団生活や社会の形成及び自己の実現の視点からその問題を解決するために考えること」といった部分、おおむね上の段のところが見方というところ、下の段のところが考え方ということで考え方を整理しております。この資料2-1につきましては、この「見方や考え方」を考えるに当たりまして、これまで御議論いただいていた三つの視点の議論、あるいは各活動の意義や役割等の学習のプロセスに関わるような部分というものを付けております。

続きまして、この2-1とまたつながってくる場所ですけれども、資料3-1、1枚だけA3で折り込みに先生方のお手元には入れさせていただいている資料でございます。ただいまの特別活動における「見方や考え方」というのを仮の案としてお示ししましたけれども、こういったことも踏まえながら、また、これまで御議論いただきました四つの活動それぞれの関係、その中でも特に学級活動を基盤に置くというようなところを御議論いただいていたところであり、また、それぞれにつきまして育成する資質・能力を明確化するという御議論を頂いてまいりました。こういったものにつきまして、先ほど資料2-1で関係性を整理した部分と併せまして、この資料3-1は、一番下に幼児教育をベースに置きまして、幼児教育で育む様々な力ということを踏まえながら、小学校・中学校・高等学校の特別活動においてどういった力を付けていくかということを重ねていったようなイメージにしておるところでございます。

この資料の中身でございますけれども、小学校・中学校・高等学校それぞれどういった力を育むかというところで、形としてはそれぞれ共通ですけれども、二重丸で総括的に書いている部分と、具体的に三つの丸で書いている部分がございます。一番下の小学校のところを例に御紹介させていただきますと、集団や社会の形成者として、先ほど御提案させていただいた特別活動の特質に応じて育まれる見方や考え方を使得、これまで「望ましい集団活動」と言ってきたところを、ちょっと言葉を開けないかというところで赤字で書いているところがございますが、「多様な他者との様々な（望ましい）集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮することを通して、次のとおり必要な資質・能力を育成する」ということで、三つ丸で付けているところが、これまで資質・能力

の三つの柱に対応して御議論いただいていたところを、活動ごとに分けるのではなく、特別活動としてはこう整理できるかなということでもとめた三つの丸でございます。

一つ目に、よりよい集団活動に向けた実践をする上で必要となる知識や技能を身に付けるとともに、多様な他者との様々な集団活動の意義を理解する。二つ目に、所属する様々な集団や自己の生活上の問題を見だし、その解決のために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにするという、いわば「思考・判断・表現等」に関わる部分。それから、三つ目は主体的な態度に関わるところでございますけれども、様々な望ましい集団活動を通して身に付けたことを生かし、よりよい人間関係を構築しようとしたり、よりよい集団生活を形成しようとしたり、自己の生き方についての考え方を深め自己の実現を図ろうとしたりする自主的・実践的な態度を育てるという部分でございます。

小学校・中学校・高等学校、余り大きく文章は書き分けておりません。この辺りは是非御意見を頂ければと思うところであるんですけども、この積み重ねの文章の中で差別化を図るというよりは、右側に紫色のグラデーションで示しております。小学校・中学校・高校に上がるにつれて、子供たちにとっては生活の範囲や関わる人間関係の多様性が広がっていくということで、それによっておのずから様々な活動の中で考えなければいけないことも増えてきたり複雑になってきたりするであろうという要素をここで表しております。この辺り、もっと書き分けたらいいんじゃないかというところなどは、是非御意見を頂けたらと思います。

この幼稚園も含めて4階建ての図になっているところは、実は各教科共通にこういった形で御議論いただいているところでもありますけれども、本特別活動ワーキンググループにおきましては、この特別活動という領域の正に特別なところと申しますか、そこを踏まえて御意見頂きたいところとしまして、この4階建ての外側の部分としまして三つ視点を入れているところがございます。この高等学校よりも更に一つ上のところに、特別活動における自主的・実践的な活動や生徒指導の機能、ガイダンスの機能——済みません、「の」が抜けていますが、ガイダンスの機能が学級経営の充実につながり学校生活の基盤を作っていくということで、特別活動の中でこの枠の中で書いたような三つの資質・能力が育まれるということだけではなくて、特別活動を進めることがこの学校生活の基盤を作っていくことの意義があるということの一つここで表しているのと、左側に「各教科等」という欄とくるぐるの矢印で結んでいるところがあります。各教科等とこの特別活動の学びをつ

なぐということでは表せないかということを書いてみたものであります。学級経営の充実を図るといような特別活動の役割、それから、学びに向かう学習集団を作っていくということによりまして、各教科等における「主体的な学び」や「協働的な学び」というのがより充実していくということが、この関係性として言えるのではないかということ。それから、特別活動におきまして、先ほど「見方や考え方」のところでも申し上げましたように、各教科等における「見方や考え方」を活用するということによりまして、より実践的な文脈で「見方や考え方」を用いることができるようになるなど、教科等の「見方や考え方」が成長して、より「深い学び」が実現するということと言えるのではないかということを表してみたところでございます。

また、右側の欄でございますけれども、これも少し書き表し方がこれでいいのかも是非御意見を頂ければと思いますが、「学校の教育目標」というところを一番右側に置きまして、この特活の4階建ての図との間に、集団活動を通じた学級・学校文化（伝統や校風と言うべきもの）の創造というものをに入れております。教育課程の中の特別活動の中でどう力を育んでいくかということや、各教科との関係でどう力を育むかということだけではなく、この特別活動の集団活動を通じまして、学級や学校の教育課程の中に表れるものだけではない文化というもの（伝統・校風）というようなものが創られ、その中で子供たちが育つことによって学校の教育目標につながっていくというような部分も、この特別活動の要素としてはあるのではないかということを書き表してみたというものでございます。

この4階建ての部分とその外側の部分ということで、この4階建ての幼稚園から小学校・中学校・高等学校の中で育む資質・能力というものが、先ほどの資料1の論点でいきますと1.に関わる部分、それから、外側の学校生活の基盤になったり、各教科との関わりで深め合ったり、あるいは学校の教育目標に対して教育課程外も含めた学級・学校文化の創造というところで関わっていくという要素は、資料1でいきますと2.目の教育全体の中における特活の位置付け、役割ということに関わってくるのではないかということでもまとめたものが、この資料3-1でございます。

若干説明が続きますので恐縮です。この資料3-1のこの三つの丸のところは、第6回まで特に中心に御議論いただいてきた三つの柱からの資質・能力というところでございますけれども、これを表の形で整理させていただきましたものが、資料3-1の次に付けております資料3-2、A4の横紙の「資質・能力の三つの柱に沿った、小・中・高を通じて特別活動

において育成すべき資質・能力の整理」ということで、「個別の知識や技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」というところで整理できないかということで、第6回までは各学級活動あるいはクラブ活動、児童会・生徒会活動等の活動ごとに整理してきたものを、一つ大きなくくりとしてまとめたのが資料3-2でございます。この資料3-2の三つの柱と資料3-1の三つ白丸で並べたところが対応しているという関係になっております。

それから、更に立て続けで恐縮です。ここまでが特別活動においてどういう力を育むかという目標に関わってくるところに対しまして、資料4で「特別活動の評価の観点（案）」というものをに入れております。白黒のA4横紙1枚物の資料でございます。

今回、第1回目のワーキンググループで、全体的にこういう観点を御議論いただきたいというところでも少し御紹介させていただきましたが、これまでの学習指導要領の改訂におきましては、おおむね学習指導要領の全体の改訂が終わった後に評価の考え方や観点を後から議論するという議論の仕方をしてまいりましたけれども、今回は、各教科の目標や学び方ということと評価の在り方ということとを一体として御議論いただきたいということで、資料4を資料3までのものと並べて御議論できるように用意させていただいたものでございます。

資料4は「特別活動の評価の観点（案）」としておりますけれども、特別活動の評価につきましては、他の教科等と大きく異なることとしまして、前回、平成20年の学習指導要領に対応した評価の在り方の見直しのときにこういうやり方ができたところでもありますけれども、各学校が自ら設定した観点を記載した上で、学級活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動あるいは学校行事という活動ごとに、評価の観点到照して評価をするという形でやっておりますが、そういった各学校が設定する観点というものを設定する際にこれを踏まえるということで、評価の観点をこういった形で整理できないだろうかということ、各ほかの教科で御議論いただいているものと横並びもとりながら整理してみたものがこちらのものでございます。

評価の観点としまして、「よりよい生活や人間関係を築くための知識・技能」、「集団の一員としての話し合い活動や実践活動を通じた思考・判断・表現」、現行ではこのところが「思考・判断・実践」となっているところを、「思考・判断・表現」という形でまとめられないだろうかと考えております。それから、「主体的によりよい生活や人間関係を築こうとする態度」というところで、おおむね全体の資質・能力の柱でいきますと、この「知

識・技能」、「思考・判断・表現」と、それから「主体的に学びに向かう態度」というところに対応しているところでございます。

内容としましても、資質・能力の三つの柱に沿った資質・能力につきまして、それを評価するとしたらこういう形になるのではないかというところを、それぞれの観点のイメージというところで並べているところでございます。

なお、先ほど、真ん中の柱のところ、現行では「思考・判断・実践」となっているところを「思考・判断・表現」とできないだろうかというところは、今回改訂の中で、全体この三つの評価の観点でおおむね整理できないだろうか、ただ、その表現は、多少、各教科などの実態に合わせて直せないだろうかということで、いずれのワーキンググループにおきましてもそういった検討をしているところであります。従来、「思考・判断・実践」としてきたところでございますけれども、当然、この実践というものは、この特別活動というものにおいて非常に重要なところでありますけれども、一方で、評価の観点三つの、態度の部分にも、知識・技能のところにも、いずれも当然この実践ということが前提になるところでございますし、また、話し合い活動や実践活動の中で思考し判断したことを伝えたり、相手の話を理解するという意味で、表現ということが特別活動においても非常に重要であるということから考えますと、「思考・判断・実践」としていたところは「思考・判断・表現」という観点にすることが適当ではないかということで、こういった案でお示しさせていただいているところでございます。

以上、済みません、行ったり来たりしながら、立て続けに資料1から資料4までを御説明させていただきました。

ごらんいただきましたとおり、それぞれの資料が全部つながり合っていますので、どこかを直せばこちらも直すという関係になっております。そういった点では、是非A3でお示しした一番大きい「特別活動のイメージ」の資料、こちらを真ん中に置いていただけますと、「見方や考え方」から育成する資質・能力、それから評価の観点、いずれにも対応するかなと思いますので、特にこの資料3-1を中心に御意見を頂ければと思います。

説明が続きますと恐縮ですけれども、是非潤達に御議論いただければと思います。よろしく願いいたします。

【貝ノ瀬主査】

ただいま御説明いただきましたが、おっしゃるように、資料3-1のA3をベースに議論した方が議論を展開しやすいんじゃないかなと私も思いますが、早速議論を始めていきたい

と思います。ちょうど切りがいいので、ここから進行須藤主査代理にお願いしたいと思います。

【須藤主査代理】

かしこまりました。それでは交代をさせていただきたいと思います。

いつものように、御発表になる方につきましては名札をお立ていただきたい、そのように思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【生重委員】

伺いたいんですけども、資料3-1のところの小・中・高と上がっていくところに、三つの丸の一番上のところで「よりよい集団活動に向けた実践をする上で必要となる知識や技能を身に付けるとともに」という最初の始まりは一緒なんですけど、小学校のところでは、「多様な他者との様々な集団活動の意義を理解する」にとどまっている。で、中学に行くと「集団活動の意義や役割を理解する」。高校に上がりますと「集団活動の意義や役割、価値を理解する」。学校種によって変化があるんだなというのは分かるんですが、私、小学校段階においてもそれぞれ役割の理解はあるのではないかと思います。児童会活動であるとかクラスでのそれぞれの役割を理解しながら、学級担任の行動を見ていると、小動物をかわいがること、それから植物を育てていくこと、そういう小さなところからでも、役割というところで責任感とか誰かのために何かをなすみたいなのは割と行われているように実感しております。そういうことの中から個々の特性が伸びていくというのもよく見られるところなので、小学校はなぜあえて「役割」を外したのかなというのを伺えたらと思います。

【小野教育課程課課長補佐】

失礼いたします。ここは是非むしろ御議論いただければということですので、入れた方がいいということで御指摘いただければと思います。生重先生おっしゃられましたとおり、言葉としては同じだけれども、その役割というのが段階によって違うというようなところで表せる部分というのももしかしたらあるかもしれませんので、是非そういったところを踏まえて御意見をまた頂けたらと思います。ありがとうございます。

【黒木委員】

今のところですが、今、学級経営のこともこの3-1の資料に入っております。よくまとめられている資料だという印象を持ちました。現在、学校では、学級経営が非常に厳しい状況にあります。そのような状況を見た時、特別活動の役割がいかに大きいかというこ

とを実感しているところでございます。私は「クラスでの子供たちの存在感だとか役割だとか、そのことを各学級できちんと実践していただくことが自己有用感につながっていくのではないのでしょうか」という話をさせていただいております。そういった意味においては、子供がクラスの中での役割意識を持つというのは、小学校段階から大切なことであると考えております。ただ、その役割の段階と申しますか、それは校種によって異なるとは思いますが、やはり子どもの学級における役割を組織づくりの中で位置付けることが、今後、学級経営を充実させていく上でも大切ではないかと、感じました。

それから、少し違和感がございましたのは、小・中・高共通的に入っている言葉の中で、これは以前から出ておりましたが、「様々な望ましい集団活動」というのが丸の三つ目に入ってきておりますが、「様々な集団活動」はイメージしやすいのですが、「様々な望ましい」となりわかりにくくなったイメージがあります。これまで「望ましい集団活動」を説明するだけでも非常に難しいことでした。「望ましい集団活動」については、一年間を通してそのような学級集団に変わっていくということを求めながら特別活動を実践したわけでございます。しかし、その上に更に「様々な」という言葉を置いたときに、「望ましい集団活動」をどのように捉えていけばよいのかということが少し戸惑ったところでございます。もしそこら辺り御意見等がありましたら、お聞きできればと思っております。

【杉田委員】

主査から言っていたように、本当はエジプトの報告をしたいところですけども、議論に入らなきゃいけないので入ります。

一つだけ。エジプト国では特活を「スモウ」と同様に捉え、もう「トッカツ」と略称名で本格的に入れる、こういうことになっています。ただ、問題は、特活のコアの部分が伝えにくいので、こういうところに特活のコアがしっかり示されることで海外にも発信しやすくなる、そういう意味でのすばらしい改訂になるんじゃないかと。そういう意味でこれも大変苦労されて作られたんだということがよく分かりました。スペシャル・アクティビティーズでもないし、エクストラ・カリキュラム・アクティビティーズでもなく、「トッカツ」と言っています。日直当番やっています。掃除やっています。ただし、そこは課題なんです。つまり、掃除もやっているし、日直も置いているけれども、それがほぼ御褒美と罰で行われているということで、話し合い活動が全然ないという意味で、コアがないと見えるんですね。これはこれから変えていくところです。

さて、そんな話をしていたら入りませんので、先に行きたいと思っておりますが、一つ、黒木

委員が話した「様々な」というところですが、多分これ、集団活動の集団の種類に「様々」を掛けているんじゃないかと思うので、実は「望ましい集団活動」というのをもう一区切りに作っていますので、これ、定義もしていますから、そこに「様々」を付けることで「望ましい集団活動」の定義そのものに様々あるんじゃないかと、見えないように文章を作るといいのではないかと思います。

それともう一つは、かなり今回の教育課程の中での特活の役割、構造みたいなものはつきり示されましたね。これは「論点整理」の中でも言われたように、教科の文脈だけでやったものではなかなか汎用的にならないよと。総合や特活はその役割をしているといったことを、つまりそのまま反映されているのがどういう言葉かということ、「各教科等の特質に応じて育まれる見方や考え方を総合的に活用して」という言葉が両方に入っているんですね、これ。そこは共通にしてもらいたいと、そう思います。しかし、先ほど小野さんから話があった中身を見ると、総合の書きっぷりと特活の書きっぷりは相当違います。これから総合も変わるということですから、そこは是非共通にしてもらいたいんですね。つまり、総合は、「見方・考え方を活用して」と書いた後に、総合の見方・考え方は言っていないんですね。つまり、「教科等の特質に応じて育まれる見方や考え方を総合的に活用して、総合の視点で考えるような」と、「視点」というような感じで書いてあると、むしろ。だから、見方・考え方が二重になってくるのか、その辺は整理して、見方・考え方に更に見方・考え方を加えるということが、見方・考え方のレベルをどのレベルで言うのかということが分かりにくくなるので、そこは総合と一緒にした方がいいのではないかと思います。

それから、ちょっと気になったのはさっきの集団の関係ですけれども、職場、家庭、自治会、議会、いろいろ出ていますけれども、ここは何か区別する必要はないんじゃないか、色を付けて。また誤解を招くので。特にそのことに関連して言うならば、その後に活動の方法がずっと並んでいますよね、プロセスのようなものが。この中で、これまでは説明として、学級活動の(1)、かつてで言う学級会活動のようなものですね、こういうものは、児童会やクラブ活動と同様の内容をやっているんだという説明をしてきたことが変わらないようにしていかなきゃならないだろうと思います。そういう点では、例えばクラブ活動や児童会活動の表記の仕方も随分これ変わっていますよね。例えばクラブ活動は、設置から始まって所属があってとあって、話し合い以外の部分もプロセスとして示していますね。そう考えれば、児童会の組織の設置はどうかとか、所属そもそもどうかとか、こ

れを使い分けて別々に書いている意味は何なのかとか、そういうことが疑問になってくるのではないかなと思いました。今回の改訂の趣旨は、今までやってきた特別活動に変革したり変質させたり、極端に新しいものを取り入れたりという改革でないのであれば、これまでの説明がきちんと通る、むしろ整理をしたという説明が通るような書きっぷりにする必要があるのでないかと思っています。

もう一つだけ、済みません、長くなりまして。育成すべき資質・能力の視点というのが三つ示されていまして、これはすごく説明しやすくなります、これから。人間関係形成と社会参画と自己実現、これを特活でやるんだと説明ができるのであれば、かなりシンプルで分かりやすいと思います。一方で、この社会参画の中に書いてある言葉や自己実現の中に書いてある、人間関係形成の中に書いてある中で、コアの部分を絶対落としてはいけないのではないかと思います。例えば社会参画の中で示している丸ポツ二つ目ですけれども、「集団の中において、個人が集団へ寄与する中で育まれるものと考えられる」と、こう解説がされていますが、何よりもコアは合意形成と協働なんですね。合意形成する話合いなしにして個が集団に寄与することだけを言えば、視点がずれてくると思います。つまり肝です、ここは。総意に基づく協働実践、これが肝です。それが分かるように示していただきたいということが一つと、人間関係形成能力といったことのところでも、「集団の中において、個人対個人」と、かなり矮小化して書いてありますけど、ここは恐らく「集団の中の個人」ということを先に書いて「個人と個人」と書かないと、極めて対個人的な人間関係といったものに狭く捉えられる可能性がある。そこを是非加えてもらいたいと思いました。自己実現の中で言うと、「現在及び将来に関わる問題を考察する」という、この言葉が私はすごくぴったりきているんですね。ですから、次の議論でまた申し上げますけれども、将来に関わる諸問題といったようなことに矮小化せず、現在及び将来というのを常にセットで使えるようにしてもらいたいと思っています。また機会があったらこのことについて触れたいと思います。

【須藤主査代理】

ありがとうございました。ただいま杉田委員の方から3点について御発言があったわけです。まず1点目、総合と一致させてほしいということをもう少し確認したいと思いますが、いかがですか、杉田委員。

【杉田委員】

総合的な学習の時間もまだ固まってなくて、これから動くという話なので、そこまで細

かくは言うべきものではないのですが、総合の書きっぷりと特活の書きっぷりを合わせていただく必要があるのではないかと考えているんです。ただ、一方で気になるのは、生活科は教科でありながら同じ書きっぷりになっているんです。つまり、生活科も「各教科等で育まれた見方や考え方を総合的に活用し」となっているので、つまり、領域という考え方をこれまで言ってきたわけですけど、そういうものの取り扱いというものをある意味そろえてもらいたいと思っています。というのは、今度、総則で、後ろの方でまた後で出てきますけれども、総則ではっきり今回教育課程の役割を書きますよね。そこに学級経営の重要性とかキャリア教育とか生徒指導とか、それから教科の協働的な学びの基礎を養うようなことが大事だと総則に書くと、今、案がなっていますが、その総則で書かれたものの中核的な役割を特活がやると示すことで、教育課程の役割が非常に分かりやすくなると思うんですね。私は、前回もそれに似たような議論があったけれども、結局、総則にそういうことが一切記されなかった結果、特別活動のような役割が明確にならなかったとも見えているので、そこは今度は迷いなく書いてほしいと思うし、何となく教科と総合と特活とか道徳といったものが相互に関連している往還という形で、今、いろんな矢印が示されていますけど、私は基本的に往還と基盤という意味は違うと思っています。往還というのは双方向ですから。基盤というのは、ある一定の基盤の下に教科が成り立つとかそういうことだと思いますので、そういったことがきちんと示されることで学校現場はぶれずに、その持っている役割というものを果たすことができるんじゃないかと、そう思っているということです。

【白松委員】

取りまとめありがとうございました。かなり分かりやすくなってきたんじゃないかなと思いつつ、私もいろいろじっくりくる部分と、ちょっとまだそれでも疑問に思っている部分とというところを話させていただきます。

3点ほど、ちょっと気になったところなんですけど、前頂いた資料、前回休んでいたんですけど、こちらの2-1の資料のときに、「地域の行事、催し物等」という、そこが大きくくりで出ちゃうと、これだけかなという印象はちょっとあって、むしろ文章の方を大きくして、そういった例は括弧の方で書いた方がじっくりくるような気がしました。今回、こちらの文章の方はとても分かりやすいなと思ったので、そちらを前面に出した方がいいのかなと。例えば自治会、議会とかでも、最近だったらPTAとか、なかなかそれに参加する保護者がいなくて、ジャンケンとかじ引きで、何かくじ引いた人が泣いちゃっているみたい

な、そういったことも起こってきているのも、一つの自治的活動への参画のそれがうまくいけてない悪い例みたいな、そういったものにも見られるので、何かそういった例示としては増やせるように、文章の方を前面に出したらいいのかなというのはちょっと印象として思いました。

二つ目は3-1の方なんですけど、「集団活動を通じた学級・学校文化の創造」という文言がどうかというのは、割と、特別活動ってそういういわゆる文化創造というのは非常に大きな部分があって、これからの社会で様々な企業体であるとかそういうものを創造していかなきゃいけないというところの一つの例示としては非常に前面に出てきて、私はすごく分かりやすいなと思いました。ただ、そこに（伝統・校風）って広がるのが、どうしても何となく、特活は毎年同じものを繰り返しているマンネリ化というのが大きな問題になっているので、どちらかというところを毎年同じことを繰り返すようなことを伝統と呼びかねないような気もしたので、むしろ伝統・校風というのは、もちろん温故知新というか、伝統があって更に創造があると思いますので、そこはあえて取ってもいいんじゃないかなというのを何となく感じました。

その横の「生活範囲や人間関係の多様性の広がり」も、ちょっとそうやって言うと大き過ぎるのかなというのと、集団活動に関わる子供たちの生活認識や社会認識が大幅に変容するのは恐らく小5ぐらいからだろうと思っています。みんなでまとまって一つのことをやったら気持ちいいよねというところから、徐々に徐々にみんなの関心が分かれて多様化して、その分、中・高のまとまりという部分が恐らく非常に難しくなっているんだと思うんですけど、そういう意味では、社会認識、生活認識、人間関係の多様化みたいなふうにして、そこが変わっていくし、変容したり多様化したりするんだというのが見えてくると分かりやすい。何となく「生活範囲」と言っちゃうと、特活はどうしても学校の中を主たる中心にして活動することが多いです。もちろん、キャリア教育になるとそちらのいわゆる意識範囲は大幅に変わってくるんだと思うんですけど、ただ、学級活動になると生活範囲はそんなに変わらないと言っちゃう部分も出ちゃうんじゃないかというのが気になりました。

あと、資料4は、恐らくこれ、まだ案が出てきたのも多分今日が初めてだったんじゃないかと思うんですけど、それで、まだこれ、検討途中だと思いますので、意見としてなんですけど、知識・技能に関しては、やはり社会参画、人間関係の方は結構書かれているんですが、自己実現が知識・技能で抜け落ちてないのかなというのがちょっと気になりました。

て、集団活動に関することははっきり書かれているんですけど、自分に関する部分というのもあっていいのかなと。例えば自己理解をするための何か知識・技能といったようなものというのも入った方がいいかなと思いましたが、黒木委員が先ほどおっしゃられたのは、私も、「様々な望ましい集団活動を通して」という文言はちょっとひっかかりまして、既にもう様々な望ましい集団活動を通して活動ができているなら、よりよい人間関係を構築する必要があるのかなとか、何となく一瞬ちょっと思いました、これ、恐らくイメージは、様々な集団活動に今まで培ってきたものを発揮できるという意味なんですよ、多分。であれば、「様々な集団活動において」というふうに、もうすっきりしちゃった方が分かりやすくなるのかなというふうな印象を受けました。

【杉田委員】

「様々な集団活動で」って言いますと、結局、「望ましい集団活動」というのは特別活動の目標に規定しているもので、集団活動というのは決して特活だけでやっているわけではなく、教科そのものがもう集団活動なんですよ。そう考えると、この「望ましい集団活動」というのは特活を意味しているんだと思うんです。つまり、「特活を通して身に付けたことを生かし」と見えるわけです。そのことも考えて修正をしていただければと思います。

【三浦委員】

私も先ほどの白松委員がおっしゃった学校文化のところはほとんど同じような感想を持っていて、できればこの括弧の中は要らないんじゃないかなと思いました。

それともう一つなんですけど、資料4辺りの評価の観点というものなんかを見たときに、「よりよい」というのが一杯出てくるんですけども、一体「よりよい」って何なのかなということはずっと考えているんですけども、恐らく一番近いのは「民主的な」とかという言葉なんじゃないかなと思っていて、それはつまり、恐らくどこの学級でも問題として横たわっているのは、子供たちの能力差であるとか、力の差であるとか、経済的な位置の違いとか、そういったものによって、学級の中でいろんな話合いをするんですけども、力の強い者とか声のでかい者に流されちゃうとか、そういった問題というのはあると思うんです。そういった中で、いかに弱い子供たちの意見や考え方をきちんと位置付けて、いわば平等性をどう担保するのかということが非常に重要で、しかもそれは先生がやるのではなくて、子供たち自身が平等性、平等な環境を作っていくということが、恐らく特別活動の話合いの中の一番の重要なポイントなんじゃないかなと思っていて、そういう意味で、やっぱり「平等性」とか「民主的な」とか、そういった文言というのはどうしても欲

しいなと個人的に感じたので、お話しさせていただきました。

【恒吉委員】

私も三浦委員がおっしゃったことが、これ、前から「よりよい」とか「望ましい集団活動」とか、イメージがある場合には多分大丈夫なんですけれども、国際的にいえば、割と価値志向を含んだ言葉なので、よりよいものが何だと思うかはかなりばらつきがあって、こちらがよいと思わないものも「よりよい」の中に入っている場合もありますよね。そうやって、要するに定義をしていなくて「よりよい」と、こうなっているので、ある種の同質的な合意を前提にした言葉だと思うんですよね。もうちょっと普遍性を持ってくるとしたら、今みたいな「民主的」とかそういう言葉が多分入った方が、ある種のイメージ、「よりよい」の中身のイメージが形成されるんじゃないか。そのときに、見たときに、国際的に民主的だと言われるようなキーワードはほとんど入ってないわけですよね。今、平等という言葉もありましたけど、社会的構成に関わるものとか、文化の多様性、入れてよくなっていると思うんですけれども、そういう感じのキーワードになっていくようなものがちょっと弱いところがあるので、「民主的」だけでも入れれば随分違うんじゃないかなという感じは受けます。イメージの具体化という意味ですね。

もう一つは、資料2-1なんですけど、上に来ているのが大体場ですよね。恐らく特別活動で身に付けたようなものを生かすような場が出てきているので、それとあと、その下のところが、同じものがちょっと大きくなっている意味が……済みません。イメージとして、やっぱりちょっとマンネリ化というのが問題となっていたので、それがやや大きさが大きくなって上に上がって場になっているみたいな雰囲気はややしてしまうので、その辺りが質的な深みが伴っているんだというのが見えた方が、恐らくイメージとしては発展的な印象を受けるんじゃないかという気はしました。

【和田委員】

今、三浦委員が言われたところの言葉の中に「生徒がやる」という言葉があったんですけど、私が非常に違和感を持ったのは、資料3-1の真ん中に大きく枠囲みがありますね、その一番上に「特別活動における自主的・実践的な活動や生徒指導の機能、ガイダンスの機能が学級経営の充実につながり」という表現の「学級経営」の「経営」のところがか何かひっかかって、どうしてそれ、自分はひっかかったのかなってずっと考えていたときに、学級の経営者は誰なんだろうと。この「学級経営」ということ、「経営」という言葉だけが、どちらかという教師の側というふうに、生徒の一人一人の伸びとか学級という集団

の充実とかというよりは経営者の視点に立った表現かなと思って、どうもこの「経営」という言葉がちょっとひっかかっております。

【吉村委員】

もうほかの委員の先生方からも出ているところなんですけれども、この「よりよい」というのがやっぱり曖昧なところがあるなという気が私もしてまして、手続的にはやっぱり「民主的な」というようなものが入っているのがいいのかなと思いますし、あるいは、そういう手続を経て議論の中で目指すような方向性の価値のものまで入れるものとしては、例えば公正とか、何かそういうものも選択肢的に入れてみるという手もあるのかなという気がしております。

それから、今日出てきた資料4は、多分、資料3-2と対になるようなものなんだろうと思っておりますけれども、ちょうど資料4の御説明のときに縦の真ん中のやつで、現行では「思考・判断・実践」となっているのを「思考・判断・表現」ということで、教科・領域などとそろえるというふうなお話があったと思います。私も、特活ではある意味ではパフォーマンス評価とかそういうことも入ってくるんでしょうから、そのパフォーマンスはある意味では表現と言っても説明はつくのかなという気はしていますが、これは多分ここではこれでいいとしても、学校の先生方の方には、「思考・判断・表現」というふうに特活も書いてしまいますと、例えば国語での表現の学力とか、教科的なそういう表現——実は教科でも国語の表現と社会科の表現と図画工作の表現が本来は違うはずなんですけれども、その違いがなかなか御理解いただけないような現状が私はあるように思っていますので、実践的な表現なんだと。文章で書くとか言葉で説明するというようなものとはまた違うというようなことをどこかで強調しておくという予備措置は要るのではないかなという気がいたしました。

そういう点では、左隣の知識・技能のところでも「価値を理解している」というところで、これも前に申し上げたかもしれませんが、これも例えば社会科とか理科の用語集的な知識を理解しているというものとは随分質的に違いますので、「理解」ということで統一したとしても、その理解という意味が実は細かくは違うんだと。質的に違うんだと。結局は、その一番右側にある態度のようなものにつながっていくような理解とか、あるいは態度として示せるような表現というようなものというところを、多分、解説とかそういうところを作るときには記述をしていただくのがいいのかなという気がしています。

あと、ちょっと長くなるんですけども、生重委員から出たのにちょっと考えてみたこ

とがあるんですが、資料3-1で、中学校に「役割」が入っていて、小学校で「役割」がないというふうなところについてなんですけれども、私が考えたのは、「集団活動の意義を理解する」。また、中学校では「集団活動の意義や役割を」ということで、中学校で「役割」が入っているのは、これは子供さん個人個人、児童個人個人の役割というよりは、社会的な生活の中あるいは学校生活の中での集団活動の役割、大きな枠の中での集団活動の役割というふうに読めますので、ここは私はこれでじっくりくるかなと。小学校の方は、集団活動の意義をまず学ぶと。集団活動の意義を学ぶところで、集団活動で子供がそれぞれ役割分担をして、お友達と役割分担しながらいろいろやることで実はみんながうまくいくと。そういうのはやっぱり集団活動の意義なんだろうと思いますので、そういう区別をすればいいのかなと私はちょっと思ったところです。そういう点では、中学校の方には「役割」と赤字でなっているところの何行か下の方に「社会」と、やっぱり中学校の場合は「社会」が入っているというところともうまくつながるのではないかなという気がちょっといたしました。別に事務局をフォローするわけじゃございませんが、私は個人的にそう考えたところでございます。

【藤田委員】

それでは、2点ほど申し上げたいと思います。一番小さいことが、私の中では小さいのか大きいのかちょっと判断がつかねるんですが、資料3-1の冒頭のところなんです、これまで「自己実現」という言葉で表現されてきたものが「自己の実現」と変わっています。例えば「発達の段階」と「発達段階」の違いについては、前回の学習指導要領でもかなり議論になったところだと思いますけれども、今回、「自己の実現」としていったことの意味や背景ということが私個人の中ではきちんと理解ができていないというところをまず申し上げて、事務局の方から教えていただきたいということです。なぜこのようなことを問うているかという、実は「発達の段階」、「発達段階」ということもそうなんですが、日本の教育のありようを外国に紹介するときに、「自己の実現」と「自己実現」、「発達の段階」と「発達段階」ってどう違うのか、非常に迷うんですね。ですから、そういった意味で、「発達の段階」のときのようなきちんとした議論があると書き分けることもできるんですけれども、今回、「自己の実現」というところの意味合いをしっかりと押さえておく必要があるのかなということも1点感じた次第です。

それから、私、これ、個人的に分かっていないことなのでございますけれども、関連して1点目の中に入ってくるんですが、この3-1ですと小・中・高と書き分けていくときの三つの白

丸があるうちの最初のところに、「価値」という言葉が高等学校で入ってくるんですね。先ほど来、「価値を理解する」というふうなこともあったと思うんですが、この「価値」という言葉と「意義」という言葉、例えば存在価値、存在意義、私の中で「存在」という言葉を前に付けると、自分の中でほぼ同義的にも聞こえてきてしまうんですね。そうすると、ここで言う理解すべき「価値」というのは何だろうかということ、もう一回、スタートラインに戻ってしまいました。なぜこんなことをこだわっているかといいますと、経営教育の分野ですと、価値観というのはそれぞれ個人が形成するものであって、育成すべき対象ではないというふうな切り分け方を平成23年の答申ではいたしました。つまり、各個人が形成していくものであって、理解していくものではないというふうな位置付けをしてあったような記憶がございます。それとの整合性を感じたときに、もちろんこの価値というのは非常に重要な概念ではありますが、「価値を理解する」というふうな位置付けでいいのかどうなのか。理解する対象とした場合、意義とどう違うのか、そういったところがこれからちょっと議論が必要かなと。言葉の「の」の使い方ですとか「価値」や「意義」との並びの関係性の整理ですとか、そういうことが私の中ではっきり分かっていないということを申し上げたかった点が1点でございます。

もう1点なんですけれども、これは資料4、先ほど白松先生が御指摘になったところと重なるんですが、個別の知識や技能に相当する部分で、将来に向けて知っていなくてはいけないこと、これをどう位置付けるのかということが非常に重要になってくるかと思います。いわゆる情意的な、横文字で言うとノンコグニティブな問題は、右欄でよりよい生活や人間関係を築こうとする態度で見ていくんですけれども、その態度とともに、よりよい生活をこれから築いていくときに必要な知はどこでどう担保していくのか。もしかすると、社会科あるいは公民的な分野等との往還や関連を図ることによってフォローできるのかもかもしれませんが、特活としてそういった知、将来に向けた知についてはどのように扱っていくのか。このところの整理がもう少し資料4あるいは資料3-2のところでも必要なのかなということを感じました。やはり情意的なところを見ていこうとしたときに、特活で見べきものは情意だけなのかという議論を改めてすべきなのかなということも思った次第です。

【須藤主査代理】

ありがとうございました。まずもって、事務局への質問がございました。「自己の実現」、「の」を入れた意味、「価値を理解して」という、その表現について、お願いします。

【小野教育課程課課長補佐】

はい、ありがとうございます。今、藤田委員から御指摘ありました「自己の実現」、「見方や考え方」のところに入っている言葉ですけれども、文章を作った意図としましては、この「自己の実現」の前に「よりよい集団生活」の「よりよい」というのがありますが、この「よりよい」が「自己の実現」に掛かっているという書き方をしています。つまり、よりよい自己を実現するという、「よりよい」を「集団生活」、「社会」、そして「自己」の三つに掛けているという意味で、「よりよい自己実現」というよりは「よりよい自己の実現」かなというふうにしたところではございますが、ただ、それで意味を表せているかどうかというところを是非御意見頂ければと存じます。

そこでまた「よりよい」かというお話になってくるんだと思うんですけども、済みません、ここでちょっと補足で、この「よりよい」というところと、あとは、もう一つで御議論いただいている「望ましい」というところ、ここ、是非御意見を頂きたいと思ひまして、特に「望ましい」のところはあえて括弧を付けております。まず、この「よりよい」は、文章を作りながら二つの意味で使ってしまったかなというところがございます、「望ましい」のように、何らかの価値を含んで正によりよいというふうな意味と、あとは、学級活動などの場合には、問題を見いだすというところがあつて、その問題を見いだして解決してよりよくするという事で、正に問題の所在によって何が「よりよい」なのかというのが変わってくるというところの両面で「よりよい」という言葉を使っているところはあつたかなと思ひます。一つ目の「よりよい」は、先ほどの「望ましい」ともつながってくるところでございますけれども、この「望ましい集団活動」、先ほど杉田先生から、「望ましい集団活動」で固まりとしてということで、学習指導要領の解説上の文言としましては、お手元の小学校の学習指導要領（特別活動編）の解説でいきますと、8ページから9ページ目にかけて、この特別活動の目標におきましての「望ましい集団活動の展開と望ましい集団活動の育成」という部分が説明されているところがございます。この辺りの「望ましい」の捉え方を参考に作っているところではあるんですけども、「望ましい集団活動」の考え方としまして、一般的に六つと言われているのがこの枠で囲まれたア、イ、ウ、エ、オ、カで、これを条件というふうに小学校の方では言っているんですけども、活動の目標を全員で作る、その目標について全員が共通の意見を持っている、こういうものが望ましい集団活動なんだという要素を六つ並べているというものがございます。ただ、小学校ではこう六つ並べておりますけれども、一方で、中学校・高校でも同

じく「望ましい集団活動」という言葉は使っておりますけれども、中・高は何が望ましいかのかということの定義というのは置いていないというところがありまして、若干、小学校と中・高で扱い方が違っているというところはございます。

今回、赤字の部分で「望ましい」を括弧にした分、一応、作成した意図としては、小学校で挙げているようなこの条件を少し文章で開いて書き下したつもりでおりまして、「望ましい集団活動」とただしなくて、その中に自主的に取り組む、実践的に取り組む、互いのよさや可能性を発揮する、こういったものが「望ましい」に本来入っている要素のところを、「望ましい」を括弧書きにした上でその後ろに少し書き下してみたというような試みをしています。「望ましい」という一言で表すのがいいのか、そこを開いて説明した方がいいのか、この辺りが正に伝え方なのかというところで、御指摘・御意見、いろいろ頂けたらいいかなと思います。

それから、先ほどの「価値」の理解、藤田先生から御指摘いただいた二つ目ですけれども、確かに価値というところは、その大事さという部分がありますけれども、意義と違って純粋に客観的なものではなくて、自分にとってのというところが掛かるところが、恐らく「意義」とか「役割」とかと「価値」というのが違ってくるところなのかなと思います。そういった意味では、確かに「意義」、「役割」、「価値」というのを三つ並べて「理解する」というので、それがうまく書き表せているかというところ、少し確かに書き分けが必要なかなというところを、今、御指摘を伺って思ったところでございます。というところで、それならば、こういう言い方がいいんじゃないかというところなんかを是非御指摘いただけたら有り難いかなと思います。よろしく申し上げます。

【杉田委員】

「望ましい」の解釈だけちょっと。古くたどると、様々な経緯があってこの「望ましい」を入れているわけで、逆に言うと、望ましくない集団活動があると、こういう考え方です。それはある意図を持って書いているので、ちょっと歴史をひもといていただく必要があるんですが、この専門は白松先生ですけれども、集団活動というのはもろ刃の剣で、やればやるほどいじめを生み出したり、それを言い換えてわざわざ解説書では「個を生かす」とか「個々が生きる」という書き方をしていますが、個を犠牲にして集団が成り立つという方法もあるわけです。全体主義的な考え方はそもそもそうですから。それを意図して一くくりで使っている言葉だという認識なわけですので、それをひとつ考えてみる、あるいは歴史をちょっとひもといてみる必要があるかなと思います。

それから、「よりよい」という言葉を使っていることもよく似ていて、到達目標だというふうには考えてないんですね、特活の場合は。つまり、ここが最高で、これが一番いいものだと考えていないので、常に今よりももっとよい関係、もっとよい集団という言い方をしてきたという経緯もあるということも、一応付け加えておきたいと思います。

【宮下委員】

ちょっと観点が違うか分かりませんが、その集団活動の集団がかなり危うい状況になっていると私は思っています、集団活動する場合には集団がしっかりしておかなければいけない。しかし、今後の特別活動を考えるときに、私のように地方の教育委員会におると、その集団そのものが今、非常に乏しくなっている。ですから、今の「望ましさ」というものの意味が大分変わってくるんじゃないかなと思っていますので、その答えは今のところ持っていませんけれども、それはかなり考えて書き込んでほしいなというのが一つです。

それから、最初の話に戻って恐縮なんですけど、各教科等の特質の「総合的に活用して」の部分が、杉田委員からの話でいくと、総合的な学習の時間と同じような感じだった。直感的に言えば、これは総合のことを書いているのかなと最初思ったようなこともあって、特別活動は特別活動の書き方があってしかるべきなのかと思いつつ、ちょっとその辺は腑に落ちてないんですね。もちろん、事務局の方で全体を通しての扱い方という前提はあるんでしょうけれども、特別活動は特別活動としての特質を書き込む方が先に来るはずなのになと思いつつ、ちょっとこれは、私、腑に落ちてないというのが一つ。それから、一つ目との関連で、以前もちょっと申し上げたように、この集団が学校の中の集団だけで考えるのかということでもいいのかなということですね。例えば、地方創生のことを意識しながら今後やっていくということになるとするならば、大変学校の規模が小規模化してきて、子供の数が少なくなってきた、学校の存在が危ういといったときに、集団そのものの幅というのは地域全体になってきているんじゃないかなと。ですから、今までの学校の考え方というのはもうかなり変わってきていて、学校の存在そのものの中と学校の存在そのものが問われている中での地域の中での学校というのはどうあるべきかとなったときに、その切り口はやっぱり特別活動だろうなと。地域とのつながりからいけば。ですから、資料2-1からいくと、先ほどから何度か出ている地域との兼ね合いのところというのは、もっと幅広く、そして強めていく必要があるんじゃないかなと。ということは、地域の中で育てられていく子供たちということがないと、多分、地域は消滅していくとい

うことを、やはり特別活動は意識していかなければならないんじゃないかなということは強く思っています。

【須藤主査代理】

ありがとうございました。

前半の内容で随分時間を使ってしまっております。ということで、前半の締めくくりとしまして、先ほど冒頭御説明を頂いたときに事務局の方から3点御議論をということでオーダーがあったわけですが、1点目が、まず資料3-1、小・中・高で大きく書き分けていないんだが、この表記でいいのかどうかということ。さらには、その上にあります、今、宮下委員も触れた内容ですが、「各教科等の特質に応じて育まれる見方や考え方」という、この表記の仕方、特別活動における物の見方・考え方をこういう表記でいいのかどうか。そして3点目は、これは先ほど吉村委員の方から御意見があったわけですが、評価の部分、資料4の、現行では「思考・判断・実践」を「思考・判断・表現」に変えたいという、この部分についてということであるわけですが、平川委員、済みません、気が付きませんでした。まずもって、どうぞ御意見をおっしゃっていただいてから、今のこの3点についてちょっと御議論いただいて、次の2番目の内容に入りたいと思います。

【平川委員】

はい、よろしく願いいたします。私も、今から申し上げることが正しいかどうか、合っているかどうか分からないんですけども、まず、人間関係形成、社会参画、自己実現の三つの視点というのは、本当すばらしいなと、現場からしても思っております。ありがとうございました。

で、資料3-1でございますけれども、これを見て、一つ一つの言葉の意味合いですとか、今までどういう歴史的な経緯があるとか、その辺りは私も不勉強なため分からない部分もございしますが、何となく受け身というか、アクティブじゃないなと思っているんです。具体的に言うと、例えば役割って、役割ですけど、何か「あなたの役割はこれです、これをやりなさい」みたいな、そうではなくて、むしろ今、世の中として求められているということは、一人一人がまず自立をして、そして貢献をしていくという、そういうイメージじゃないかなと思っているんですが、どうしても「あなたの役割はこうです」って上から目線でこういうふうにしてやる。自分で役割を感じるということも一つあるかもしれませんが、個というものをまず持って、誰かに依存するとかそういうことじゃなくて、自由を謳歌する代わりに例えば責任をとるとか、自立をした一人一人の、もちろん子供です

から未熟ですけれども、そこを目指そうという、自立を目指そうということで、私どもふだん不断の教育というのをやっているわけなんですけど、その自立ということと貢献ということをもう少しアクティブな——貢献という物すごくアクティブな感じがするんですけど、そういう部分が載ってないなと思って少し残念に感じております。

それから、再三再四申し上げて申し訳ないんですけど、今の日本でやはりクリティカルというようなことが学校においても忘れ去られてしまっているというのが実情でございます。これが主権者教育とか正に日本人の弱い部分でございます、先ほど杉田委員の方から「望ましい」とか「よりよい」というのはそういうことがあるんだと言いますが、じゃあ、クリティカルなことも認められなくて、何となくクラスの中でいて、先生たちの言うように「右向け右」と言ったら右向いて、しょうがない、今は向いておいてやるかと。

「左向け左」と言ったら左向くというのが、果たして望ましい集団の在り方なのかというふうに思うんです。その中では、もちろん関心・意欲・態度、これで落とされるからといって、クリティカルなことをぐっと抑える生徒もたくさんおりますが、「でも、先生、これ、違うんじゃないの」とか「私、この学校のこういうところ、違うと思うよ」とかということを議論し合い、そして合意形成するというのが、「実践」とかアクティブな部分ですね、「貢献する」とか、そういう言葉がもう少しここに載っていくと、学校としては受け身ではなくて、パッシブではなくてアクティブ、正にアクティブ・ラーニングですね、アクティブなふうにならないのかなと感じながらこの3-1の資料を見ておりました。

集団についていろいろ議論がございましたけれども、学校そのものは集団ですので、この「論点整理」のところにもございましたけれども、学校の意義をまた改めて問い直しなさいという大臣からの諮問もあって、皆さんそういう視点で見ているらっしゃると思うんですけども、一人、人がいて、ファミリーというか、家族がいて、学校というところに所属して、部活なりというのに所属したり、あるいは習い事をしたり、地域の中でちょっとお祭りでお手伝いをしたり、あるいは生徒会というリーダーというところにいたり、どれもこれも所属をしているわけなんですけれども、もう一つ、ここの中で何とかならないかなと思ったのは、先ほど地域の中で育てられているとかということがあったんですが、学校そのものが実は学習する学校ということで、大人も子供も学んでいる状況が学校を中核にして行われているという、そういう全然今までとがらっと実は変えなきゃいけない時代に入っているんじゃないかなと思うんですけども、特活とか学活、特別活動というのはその中心の正に礎になる部分で、私は非常に大切な部分だと思っているんですけど、そこ

の部分、意義、役割、確かにそうなんですけれども、貢献とかクリティカルとか合意形成とか、そちらの——ただ、民主主義という言葉も出て、民主主義、是非載せていただきたいんですけど、民主的というのってちょっとデモクラティックとは違うと思っていました、民本主義と言ったらいいのか、それも分かりませんが、ここになると言葉の捉え方なので分かりませんが、もう少し主権者教育とかに合った形のものが入ってもいいかなと思いました。

あと、この表についてはいろいろ議論がございましたけれども、2-1です。この先の線でつなげるというのは多少違和感がありますけれども、でも、その次、PTAもそうですし、自治会もそうですし、議会もそうですし、家庭、職場、こういう実例がわーっと別に線で結び付かなくても、関係しているんだよということが分かれば、日本特有のもので、分かりやすいかなとは私は思いました。

ちょっとまとまりがない意見で申し訳ございません。以上です。

【小林委員】

資料3-1ですが、再三話題になっていますが言葉の使い方について申し上げます。やはり、読み手が混乱したり、あるいはイメージが膨らみ過ぎたりするような言葉遣いというのは注意が必要だと思います。「よりよい集団生活」、「よりよい集団活動」、「望ましい集団活動」と似たような言葉が出ていますが、どのように解釈されていくのかなということを思いました。

それから、もう一つは語句のところですが、「よりよい人間関係の構築」、「よりよい集団生活や社会の形成」という言葉があります。ただ、それまでは、「人間関係の形成」、「社会への参画」という言葉を使っていました。「人間関係の構築」と「人間関係の形成」という、構築と形成は同じように同義と捉えていいのか。それから、「社会の形成」と「社会への参画」、形成と参画を同義と捉えていいものなのかなと思いました。

資料2-1になりますが、「特別活動における各活動の意義や役割（学校行事）」の最後のページですが、体験的な活動の実践、その下に「合意形成を図る力」とありますが、その中に「協調性」ということはないのかなと。他者と力を合わせて実践することにより協調性が育まれていくといったことはないのかなと思いました。

【白松委員】

3点に関わってなんですけど、先ほど事務局の方からありましたけど、「望ましい集団活動」とか「よりよい人間関係」を1回開いてみたら、小学校・中学校・高校で望んでいるもの

の姿が若干違って来るんじゃないかと。それを議論した後、ひよっとするとまたこちらの3-1のように戻ってくるかもしれないですけど、そのところが、開いてみて細かく規定した場合、書いてみた場合、どういう違いがあるかというところに小・中・高の特性が見えてくるんじゃないかなという思いがあります、僕自身は。

あと、先ほどから出た「学級経営」とか「望ましい集団活動」というのは、何か教師の思いに生徒を当てはめていくみたいなイメージというのが、実際、そういうクラスがあるということによく分かります。そういう学校があるということもよく分かるんですけど、そもそも日本の学級経営という概念自体は、出発点から多少新教育の影響を受けているので、子供たちの参画を基本認めていますし、「望ましい集団活動」というのは子供の意見表明権を認めているということが一番大きいので、そういう意味では、伝統的にはそもそも子供が意見表明権を学級経営や学校経営に対して持っているというのは、世界的に見て結構珍しい国であるとは思いますが。そういった特性のある概念だということはやはり強調していかなくちゃいけないですけど、ただ、それとは逆行するような学級や学校があるということは確かだと思います。

【須藤主査代理】

ありがとうございました。

ほか、いかがでしょうか。特に御意見がなければ、後半の内容といたしますか、時間はもう少ないわけですが、に移動させていただきます。事務局の方から2番目の内容について御説明をお願いします。

【小野教育課程課課長補佐】

それでは、後半は、資料5-1、横刷りの3枚の紙でございますけれども、こちらで小学校特別活動の内容の構成、今回は学級活動・ホームルーム活動に絞っていますけれども、そのイメージ案につきまして御議論いただければと思っております。

この議論は、前半で御議論いただきました「見方や考え方」、資質・能力、評価とも当然関わってまいりますので、また関連して御議論いただければと思っておりますけれども、これを御議論いただきたいという趣旨としましては、特に資料2-1でもお示しました中・高での三つの活動というものの中でも、これまでの議論の中で学級活動・ホームルームがその基盤になるであろうというところの御指摘を頂きました。まずは、この学級活動というところの内容の構成を通じて、そもそも学級活動というものでどういう力を育成することを目指していくのかというのを明らかにするということが、今回の改訂の中の構成を議論

するに当たって一番大事なところかなと用意しているところであります。

一番上の枠の中で「学級活動の改善の方向性」と入れておりますけれども、これまで御議論いただきました特別活動で育成すべき資質・能力の三つの視点、人間関係、社会への参画、自己実現、あるいは総則との対応ということも先ほど御意見を頂きましたけれども、総則の構成の議論が今進んでいるところ、あるいは「論点整理」で示されたところ、あるいは、正に今、社会の要請として考えられるところ、こういったものを整理すべき視点とあったところや、教育課程全体における特別活動の役割、こういったものを踏まえて各活動の内容構成の構造を整理し、趣旨を明確化するというところで改善ができればということで資料を用意したのが5-1でございます。

5-1の構成としましては、1ページ目に小学校のものを入れてはありますが、申し訳ありません、構成上、中学校を例に御説明した方がいいかなと思いますので、1ページめくっていただきまして2ページをお開きいただけますでしょうか。この資料は、前回第6回の際に、現行の中学校学習指導要領とそれに合わせて整理すべき視点を示したものをバージョンアップさせたものでございます。左側に箇条書きになっておりますのが、現行の中学校学習指導要領の特別活動の中のうち、学級活動に関する目標・内容のものでございます。(1)、(2)、(3)と三つの構成に分かれております。これにつきまして左側で青い記号で、先ほど来まで御議論いただいております三つの視点との関係性というものと、特活の学級活動の内容項目との関連性というものを濃淡を付けて表してみたものがこの部分でございます。濃淡を付けておりますのは、濃いものと薄いものはあるけれども、やはり人間関係、社会参画、自己実現、それぞれ関わり合っておりますので、自己実現には完全に関わっているけど、人間関係に全く関わっていないものはないであろうということで、濃淡という形で表しています。それぞれ一つだけ付いているものもあれば、二つ付いているものもあればということで、この三つのもので完全にこの内容構成を分けるということではできませんけれども、何となくそれぞれの項目同士の関係がこれによって見えてくるのではないかとということで、試みでこの三つの視点との関係性を表してみたものでございます。

それから、真ん中にピンクの枠で囲みまして、それぞれの内容項目と点線で結んでいるものがございます。これが、前回までの資料の中でも幾つか示したものを少し書き加えておりますけれども、総則の構成や社会の要請などを踏まえて整理すべき視点と現行の内容との関わりとしてこの辺がつながっているのではないかとこのものを表したものであります。社会参画や自治の視点、あるいは学級経営と関連する視点、あるいは例えば多様性を

尊重する社会の視点ですとか、心身の健康、安全・防災の視点、主体的な学びの視点、キャリア形成の視点などなどと、こういった項目がつながっているんじゃないかということをも真ん中で少し結び付けたものでございます。

こういった三つの視点との関係あるいは整理すべき視点との関係も踏まえまして、内容の構成としてこういう構成が考えられるかなとして表したのが右側の改善のイメージ案というものでございます。これも三つの柱立てにしているところは変わっていないんですけども、従来の三つの柱立てが、三つがどういう構成原理で分かれているのか、あるいはどういう関わりになっているのかというのが必ずしも明確ではないところもあったのかなというところで、少し明らかにできないかということでまとめたものであります。

一つ目に、「学級や学校における集団生活の形成、参画」（仮称）としておりますが、主として自発的・自治的な集団生活の形成・運営に関わる内容であって、集団として議題を選定して話し合い、合意形成をすることを大事にするような活動というところであり、日々の学級経営と関連を図るべきところなのかなということで挙げております。

2番目の柱としましては、「一人一人の適応や成長及び健康安全な生活の実現」ということで、主に一人一人が現在直面する生活における適応・成長・自律等に関わる内容であって、一人一人の理解や自覚等を大事にすることが必要な活動ということで書き分けております。

一つ目の観点につきましては、学級全体でその問題をどう捉え、学級全体としてどう取り組んでいくかということになるのに対しまして、二つ目の柱につきましては、その問題は全員にとって大事なことではあるけれども、それについて一人一人どう取り組んでいくかというところは正に一人一人で行っていかねばいけないもの。例えば多様性を尊重した望ましい人間関係の形成とか、思春期の不安や悩みの解決、あるいは健康や安全に関するものというのは、それについて関わることはみんな大事であるけれども、それに対してどう関わるかは一人一人違うべきだろうというのが、(2)と(1)の構成原理の違いとして書いております。そういった個別、個別の違いというものもありますので、(2)につきましては、個別の生活指導、生徒指導と関連を図ることが必要なものではないか。あるいは、例えば食とか健康に関するものは、それぞれ家庭科や保健体育などの教科と関係するところもありますので、関係教科との関連を図るということもこの構成上必要ではないかということでまとめております。

それから、三つ目の柱につきましては、従来は「学業と進路」という名前にしていたと

ころですけれども、「一人一人のキャリア形成と実現」という仮称にしております。ここも特に御議論いただきたい点ではあるんですけれども、ここに「キャリア」という単語を入れておりますけれども、決してキャリア教育というものをここだけでやるということではなくて、キャリア形成に関わるものは特別活動全体に当然関わりますし、さらに言えば、学校生活全体の中で育てていくものであるということは前提としながらも、特にキャリアというものと一人一人の主体的な学びというものをどう結び付けていくのかという部分が必要であろうということでここを位置付けております。主に将来に向けた自己の実現に関わる内容であって、一人一人の主体的な意思決定を大事にする活動ということで、2番目の柱は、一人一人が関わっていくものではありませんけれども、それが課題であるということはみんなに共通するものであると。それに対して三つ目の一人一人のキャリア形成というところは、そもそも何を目指していくのかということ自体が一人一人違うであろうということが一つ構成原理の違いであることとして入れています。

この三つ目のところは、これまで御議論いただいてきた特別活動だけではなくて、学校生活の中のいろんな学びというものと自己のキャリアをつなげるということの特活の中で大事にすべきじゃないかということで、ポートフォリオ的なもの、あるいはキャリアレポート的なものというものを活用していくということも考えられるのではないかという御意見を頂いてきたことも踏まえながら作ったものであります。特活の学級活動のこの(3)の中で、いろいろな職業に関わるものを学んだり、キャリアに関することを学んだりというよりは、様々な教科、特別活動で学んでものを結び付けるような活動をこの中でやっていくということで、個に応じた学習の支援や進路指導との関連を図っていくことが必要な固まりということでまとめられないかということで入っております。

これをまとめる、この御議論を頂くに当たり、この資料を作るとき、事務局としても正直かなり迷いがございまして、これまでも御議論の中で、特別活動はどうしてもいわゆる〇〇教育といいますか、社会の要請に応じていろいろな要請される教育でやっていくものが、どうしてもすぐ特活でこれも入れるべきだ、あれもやるべきだというふうにおりてきがちであるというものに対して、今回の改訂の全体の考え方としましては、特別活動が果たす部分もありますけれども、いわゆる〇〇教育については、核となるところがありながらも、学校教育全体でカリキュラム・マネジメントの中でどうやってその力を育てていくかという中で育てていくべきであるという中で、こういうふうの内容構成を議論していただいて、この例示でいろいろ挙げていますけれども、こういう形とすると、どうしてもあ

の言葉が入ってないとか、この言葉が入ってないという議論になってしまうかなというところを若干懸念しながらも、ある程度例示を挙げながらでない構成が御議論いただけないかなということでお示ししました。ですので、今回、是非御議論いただきたいのは、ここにあの言葉が入ってない、この言葉が入ってないということも当然最終的にはございますけれども、こういう構成原理で特別活動の中での学級活動の構成原理を示すことができれば、学級活動・特活の意義がより伝わりやすくなるであろうというような構造にするためにはどうしたらいいかというところで特に御意見を頂けたらと思います。

それで、今、順番前後して、中学校を先にごらんいただきましたのは、小学校と中学校・高校の学級活動・ホームルーム活動の構成が違っているところがありまして、今、中学校で(1)、(2)、(3)とした構成は、高等学校のホームルームも比較的近いんですけれども、1ページ目とちょっと比べていただきますと、現行の小学校学習指導要領では二つの構成になっています。「学級や学校の生活づくり」と「日常の生活や学習への適応及び健康安全」という柱になっておりまして、中学校の(3)の「学業と進路」に直接対応するところは固まりとしては分けられてないということになっております。ここをどうしたらいいのかということも是非御議論いただきたいと思っております。

1ページ目の改善のイメージ案では、(1)と(2)ということに分けつつも、(2)の中で中学校以降における(3)につながっていく部分があるのではないかと。小学校におきましては、中学校・高校における進路指導のように、正に子供がバーチャルな意味ではなくて本当に自分の進路を判断する、決断する場面というのがないというところは、小学校と中学校・高校の大きな違いではありますけれども、やはり小学校のうちから一人一人キャリア形成に関わる力を育てていくということを考えると、中学校・高校の(3)につながっていく部分を小学校でどういうふうに整理していったらいいか、そういったところを是非御意見を頂けたらと思ひまして、こういう書き方にしてお示ししているところでございます。

残り限られたお時間の中ですけれども、是非忌憚なく御意見を頂きまして、また、今回、この学級活動を中心に御意見を頂けましたら、これに合わせてまたほかの学校行事、児童会・生徒会、クラブ活動につきましても整理できればと思っております。御意見を頂ければと思ひます。よろしくお願ひいたします。

【杉田委員】

今、事務局より、これまで必ずしも明確に整理されてなかったと言いましたけど、むし

る明確だったんですよ、これ。そもそも自治活動というのが先に生まれて、それが定義され、加えて生徒指導が入り、で、進路指導が入ったという順番にこれを示してきたわけで、内容としては極めて整理されていたんです。ただ、今回やろうとしていることはそういうことではなく、それぞれ資質・能力でもう一回見直そうって、再構成しようということなんです。そうやった場合には、これまでとは全く別の考え方でやっていくというふうには考えないと、これまでのものとは、うまくいかなかったから変えたんだという説明は多分通らないと思いますから、そういう説明の方がいいのではないかと思います。

結論から言うと、キャリア教育を矮小化すべきでないと思います。決して三つ目の、つまり新しい考え方の資質・能力論でいえば、結論から言えば、小学校にも(3)を設けるべきではないかと思っているんですね。資質・能力論でいえばですよ。それをキャリアと言ってしまうから何となくキャリア教育が入ってきたように見えますけど、そうでなく、そもそも全てキャリア教育だし、そう考えるならば、ここにのみ、言葉のことにこだわらないようにとおっしゃったけど、ここにのみ書くことがかえってマイナスになるのではないかと私は思っています。例えば、じゃあどうするのがいいのかと言われると困るんですが、現在及び将来に向けての自己実現とか、そういう言葉でもいいのではないかと思いますし、そういう意味でいえば、例えば学級活動の(2)にかつて入っていた学習のことですね、学びの意義のようなこと、小学校もかつては入っていましたが、それが抜いてありますが、こういうことが大事であればもう一回復活させるとか、あるいは働くことの意義みたいなものはそこに入るのか、むしろ働くことの意義の理解は、そう考えると社会参画に入るのかとか、そういう議論でもう一回作り直すのであれば、(3)というものを小学校だけに置かない理由というのはかえって説明がつかない。かえってですね。それと資質・能力、ただし、育てたい資質・能力を、特別活動で育成すべき資質・能力で分けていますよと一応書いておいて、実はそれは分けにくいので、総則の構成や社会の要請などを踏まえて整理していますと書いていますが、この三つの視点で分けるのも不可能に近いんですよ。だから、かえってこの左側を出すことによって誤解を招きますね、これ。ちょっと見方を変えればみんな片付いちゃいますし、人によって変わります。だから、むしろこれは示さない方がよいし、むしろそこを書かないで、社会の要請や総則に基づいて分けましたってはっきり言って、小学校も中学校もこの機会に(3)を作ってそろえていくという方法でないと、今後出ていく、例えばキャリアパスポートのような何らかの資料のイメージは、中・高で作って、小学校でやらないという話になっちゃうんですね、そういう分け

方で言う。そこは明確にして、もうちょっとキャリア教育は広いものですから、キャリアパスポートといったちょっと矮小化した内容でなく、例えば児童会でやった経験も、学級会でやった経験、みんなキャリアパスなわけで、ましてキャリア形成という言葉が将来に向けて必要な資質・能力を身に付けることを指していますから、非常に広いのに内容が狭いという感じがします。むしろ項目の中にキャリアという言葉が入ってきてもいいとは思いますが、この表題に入れるべきではないのではないかと思います。

以上です。あ、一つだけ、平川委員がおっしゃったことはそのとおりで、今の学級経営・学校経営のやり方というのは、極めて集団を作って、そこに合うような人間を育てるという方向がどんどん広がっているんです。だから改めて——白松委員が言ったようなことを実はオブラートに包んで書いてこなかったわけです、そういうことを。何らかの形で書くべきです、これは。例えば学級目標という文化は日本にしかないんですよ。あの学級目標という文化は、実は極めて全体主義的に見えるときと自由に見える場合があって、このことをきっちり書かないから、今の学級経営が、学級目標に基づいて行われている学級経営が同調圧力を高める方向にどんどん行っているということも、皆さんで共有しておきたいと思います。

【藤田委員】

今の杉田先生の御発言、ほとんど同意見です。小学校に(3)がないということは、大きなこれからの弱点を生み出してしまうことになってしまいます。やはり小学校から全体を貫く体系的な取組ということが求められていって、しかも、現在のものを見ても、例えば、「希望や目標をもって生きる態度の形成」というのが(2)のAに入っていますし、「望ましい人間関係の形成」等もやはり広い意味では現在及び将来のキャリア形成にとって必要であるので、そういった意味では(3)が絶対的に必要だろうと思います。ですから、これは杉田先生と全く同じ考えです。

それから、2番目も同じことなんですけれども、現行から改善のイメージ案を導こうとすると、これは非常に難しい。一つの項目がふくそう的に解釈可能ですし、様々な資質・能力を一つの項目が育んできたので、その資質・能力でくくろうとすると、対応関係を示そうとすればするほどいろんな矢印やいろんなものが必要になってきて、ここ、何でこの言葉が抜けているんだとか、なぜここに線がないんだとか、そういうことの議論を生んでしまう。そういう、不毛とは言いませんけれども、ややもすると重箱の隅をつつきかねないような議論を生んでしまうので、対応関係を前面に打ち出すということは得策では

ないなということが2番目でございます。全く杉田先生と一緒にです。

3番目、これは若干、杉田先生と立場が違ってくるのかもしれないんですけども、キャリア教育は全ての教育活動を通して行う、これはもちろん大前提でございます。そのときに、キャリア教育の中の例えば基礎的・汎用的能力、今のところ四つで区切られて示されていますけれども、その四つの中のキャリアプランニングのところ、自分のキャリアをどう将来展望して見ていくのか。そこには課題対応とかそういうことはとりあえず一旦緩い線を引きながら、キャリアプランニングのところを見ていきますよというふうにもし見るとするならば、もしかしたらキャリアという言葉も使い得るのかもしれない。ただ、現在の書き方ですと、今日は言葉の問題は微に入り細に入り議論しないということですが、やはりキャリア形成と実現、この実現という問題は一体どういうことなのかとか、様々な議論を呼んでしまうので、もうちょっと言葉については今後吟味していく必要がありますが、キャリア教育を矮小化せずに、なおかつ、それぞれ一人一人の個の将来展望を支援していくことの重要性を示していく。それがもしかすると、先ほど杉田先生がおっしゃったように将来に向けた自己の実現とかそういう言い方になってくるのかもしれないが、これからの議論の必要な部分だなということを感じました。

【宮下委員】

今回の指導要領の改訂で、やはり小・中・高、かなり合わせて議論してきた今の資料になったと思いますので、その意味からすると、今回は視点が変わったとしてもこのスタンスは変えないというか、より進めてほしいなということからすると、(3)を入れて議論して行ってほしいなということでもあります。

とりわけ、地方の話になるんですけども、中学校では職場体験とか定着したり、それをしたときに、今、地方からは「じゃあ、小学校、何やっているの」という話の方が多いんですよね。反対に地域から、「小学生の明るい声が地域に響いてほしいな」、「会社見に来てくれたらうれしいな」みたいなことからすると、やはりどこかで小学校から発達の段階を踏まえたいろんな活動があるんですよというようなことをはっきり示して、小学校の先生方も取り組めるようにしておいてあげる、その準備をするというのが指導要領だとすれば、そうして行ってほしいなというのが一つです。

もう一つは、18歳の選挙権のことからいくと、私は、以前も言いましたように、18歳は高校生だけでも、教育基本法の改正からしての義務教育の課程で終わったときに、社会人として自立ということが前提でありますので、そういう意味からすると、小学校の6年

間と中学校の3年間、9年間でやはりそれを見通したところまでは社会参画ということも含めて整理をしていってほしいなと思っています。

【平川委員】

杉田委員を初め皆さんおっしゃっていただいたとおりで、私も大賛成なんですけれども、これ、改善のイメージ案だけにさせていただきたいと思います。と申しますのは、学校の状況とか子供の実態、これは資質・能力に合わせてカリキュラム・マネジメントを学校ごとにしていくというのが今回の売りですよ。なので、対応する必要は全くないと思います。これをやることによってごちゃごちゃしますので、やめていただきたい。

それともう一つは、小学校ですね。小学校にやはり(3)のキャリア教育というのは絶対に入れてほしいです。というのは、学区の小学校に「キャリア教育やってください」って言えば、「小学校、まだ早いですよ」って絶対言うんですよ。何を言っているんですか。幼稚園、小学校、小学生から、もう子供をなめているんですかと思うんですけども、絶対にこれは入れていただかないと、そっちの方にやっぱり目が行きませんから、是非入れていただきたい。

それと最後に、(2)のところ私に是非入れていただきたいのは、ちょっと日本語には訳せないんですが、well-beingという概念でございます。学力だけではなくて、心の健康、体の健康、そして幸福感というようなことで、今、世界、具体的に申し上げますと、デンマーク、スコットランド、オランダなんかでは、well-beingということで、子供をゼロ歳児から24歳まで社会として育てていくという考え方が基本となっております。なかなか日本の子供、幸福感でいいますと、いろんな調査を見ておきますと、ユニセフの調査にしても非常に低いというところが残念に思っております、どこかで、今回は無理であっても、well-being、これは幸福感と訳すのか、何と訳すのか分かりませんが、是非うまい日本語をどなたかが見つけていただいて、この概念をやはり入れていただかないと、どうしても学力重視というところになってしまうのかなと思っておりますので、是非、小野さん、よろしくお願いいたします。

【黒木委員】

私も(3)につきましては、これまでも各学校現場でいろんな話をさせていただきますときに、中学校以降は進路指導の中でキャリア教育の話をしたりしてきたわけですが、小学校の場合、非常に説明しづらくて、進路学習とか、少しぼかしながら説明してきた経験がございます。是非ともきちんと位置付けていただいて、次の学習指導要領の目玉とは言い

ませんが、学級活動の新しい視点に加えられればと思いました。

それから、一つだけ、改善のイメージ案を読ませていただいて感じたこととしまして現在、私どもの地域でもようやく「生活づくり」という言葉が定着し始めまして、学級の生活を創るために、学級目標を教師と子どもでと一緒に作ったりするような活動が定着し始めております。ですから、そういう定着し始めたものをまた言葉を変えていくというのは、学校を混乱させてしまうのではないかと懸念しております。長い時間をかけて「生活づくり」という言葉が定着してきたような感じがしております。

以上でございます。

【恒吉委員】

先ほどから出ているキャリアなんですけれども、日本の場合、どうしてもキャリアが狭く見られる傾向があるんだと思うんですよね。例えばアメリカの大学に願書を出すときに、必ず、今までどういう経験をしてきて、その経験が——それ、もう子供時代からの話ですよ。その経験がどうやってここで学びたいことにつながって、それがやがてどういうふうに出たときにつながっていくのかと。要するに、どう生きるかとか、どういうふうに関係とつながっていきたくて思っているのかという、個人の側から見ると、自分はこういうふうなところに到達したいんだという一つの道筋の未来につながっていくもので、教育者側から見ると、どういうところにつながっていけるんだろうかという、そういうものだと思うんです。だから、そういうふう考えた場合には、当然、小学校にも、もちろんもっと前にも入っていいような性質のものじゃないかと思えます。

もう一つが、どういうところに到達したいのかということ割と見せてこなかった、考えさせてこなかったと。大学なんかでも考えさせてこなかったと思うんです。だから、どういう人を育てたいのか、特別活動でもどういう人を育てたいのかって、一つの像じゃなくて、複数のタイプの像がイメージできてくる。その中でここは外せないという部分の中で、例えば批判的思考とかあるのであれば、それが入ってくる。もう一つは、どのような社会にしようとしているのかというのがやはりそこにもう一つあって、そこが例えばグローバルとかが入るのであれば、そういう部分がどこかしら入ってくる、タームでもいいから入ってくるというのが、形としては三つの層で、そしてキャリアはつなげる一つの連続的なものの発展していくものの一つなのかなと思えます。

【白松委員】

端的になんですけど、今までの(2)の中に、いわゆる自己実現という前に向かって目

標を想定していくものと、今の自分の生活を振り返って、いわゆる自己指導能力ですね、自分の生活を振り返る力という二つが混在していたんだと思います。これを、(2)を自己指導能力に近づくものとして、(3)を自己実現に近づくものとして整理すれば、確かに分かりやすいなと思いましたし、愛媛県も小・中一貫教育とか接続教育がかなり進められていますので、そういう意味では、接続する部分がないと非常に困るかなというのは思いました。ただ、逆に、小学校の方、じゃあ上下に割り振っていってみると、結構、自己実現に関するものと人間関係の形成はひょっとして上に入るようになっちゃうんじゃないかなと思うと、実は自己指導能力に関わるころは非常に脆弱にならないかなというのは、ちよっと一瞬、感想として思いました。

【吉村委員】

中学校の改善のイメージ案、三つで御説明いただいて、やっぱりこういうイメージ案があった方が分かりやすいなという気はしています。ただ、先ほども平川委員からもあったように、学校現場ではというようなお話をさせていただくと、どうもこの(1)、(2)、(3)をこのまま出してしまうと、「この活動は(1)なんですか、(2)なんですか、(3)なんですか」みたいな話が出てきてしまって、実はこの(1)、(2)、(3)はきちっと関連付けられているような活動なんだろうと。どこが中心的になるかというのでは三つに分けられても、全部実は関わるようなところはあるんだと思います。ですから、そういう点では、イメージ案を整理しながらも、出し方はちょっと工夫が必要なのではないかなと思っています。

それから、小学校で(3)のキャリア、やはり恒吉委員がさっき言われたように、キャリア形成というのを狭く捉えると小学校ではなかなか難しいんですけども、例えばキャリアが社会との関わりの中で自己形成をしていく、また、社会の中で自分がどう生きていくかというのを積み重ねていくということであれば、これはもう幼稚園とかもずっと前から本来は積み重ねられてきているものですので、小学校でこういうところを入れないというのはちょっと私はどうかなという気がしています。そういう点では、宮崎にいるものから、特に中山間部はまだ地域が生きていますので、幼稚園、小学生からずっと地域の神楽のお手伝いをしたり、舞いも舞ったりとか、子供の頃からある意味では地域の関わりが深く、地域の役割を担いながら地域社会を担うと。その中でもやっぱり宮崎で育つと職場がないので、宮崎に残って仕事を続けるか、都会に出ていくかというようなシビアな選択も迫られるんですけど、そういうときにやっぱり小学校から地域で生きてきている中で

自分がどう生きていくかというのをシビアに考える。そういう点では、小学校、都心部とローカルな地域ではちょっと事情が違うのかもしれませんが、そういう視点も大事なんじゃないかなと思っています。

【生重委員】

皆さんの先生も言ってくださったんですが、私も小学校の方に(3)を入れていただけるとうれしいです。それは小・中連携という意味においても、今、私がコーディネーターとして携わっている全国の学校なんかは、かなり小学校の段階からキャリア教育を積極的に、地方の過疎の地域でもそういうことを積極的に行うことによって、中学校に行ったときの意識が違ってくるか、それから、ごく少数、子供たちが中学校でどうしても集団になじめずに不登校になっていく現状を、このキャリア教育視点を入れることで子供たちが集団になじんでいくという、そういう実践事例も随分見てきております。ぜひ小学校の段階から小・中と、今まだまだある小学校と中学校の教員の意識の差みたいなものを埋めていき、共に研修していく場を作っていくというふうにしていくためにも、その連続性ということを意識していただきたいなど。それが本来の意味での生きる力を身に付けるためのキャリア教育というところにつながっていきますし、発達段階に応じた形でやっていくことで、その学びの中から本来の教科とか学力というところにもつながっていく。そういう新しいものにしないと、次の社会に開かれた教育課程というところに応えたものになっていかないのではないかなと思っています。

【杉田委員】

今、皆さんの発言が言い当てているけど、(3)を入れたらキャリア教育をやるという発言になるわけですよ、皆さん。だから、それは説明がつかないんです、そういう言い方をしたら。そうじゃないんですよ。これまでもキャリア教育をやっていたけれども、それ全体がキャリア教育だというふうには示さないと正に矮小化されるわけですよ、

【大杉教育課程企画室長】

そういう意味で申し上げますと、特活だけでやるものでもないもので、その意味はクリアにしたいと思います。

【須藤主査代理】

ありがとうございました。非常に重要な提起が杉田委員からあったと思います。これは、白松委員が先ほどおっしゃった、(3)が自己実現、そして(2)が自己指導との関わり、そういうくり方との関わりもありますね。(1)は集団と個の関わりであるわけですよ。

そういうことで、このことについてはまだまだ御議論いただきたいところなのですが、本日は前半の方に重点的な時間配分をさせていただきました。以上で本日予定されていた議題は終了させていただきたいと思います。

以上をもちまして本日の特別活動ワーキンググループを終了させていただきます。ありがとうございました。

— 了 —